

愛による叱責

詩篇141篇

正しい者が愛情をもって私を打ち、私を責めますように。それは頭にそそがれる油です。私の頭がそれを拒まないようにしてください。(5/新改訳)

窮地にある詩人が神の助けを求めて叫んでいます。悪者たちが詩人を罪の中へと誘っているため、その誘惑から守られるようにと求めているのです。

詩人はここで、自分が守られることだけを求めているわけではありません。正しい人々が本人のためを思つて語ってくれる戒めの言葉を素直な心で受け止めることができましようにと祈ります。わたしたちは他の人から責められるようなとき、たといそれが射た批判であつたとしても、感情的に受け入れられず、せつかくの忠告を拒絶してしまうことがあります。それによつてせつかくの成長のチャンス逃してしまいます。主なる神はそのような隣人の言葉を通してわたしたちをあえてむち打ち、さらなる祝福を与えようと願つておられます。それゆえ詩人は、「私の頭がそれを拒まないようにしてください」と祈ります。へりくだりの心をもつて、隣人の忠告を受け入れられるようにということです。「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない。主は愛する者を訓練し、受けいれるすべての子を、むち打たれるのである」(ヘブル一二5、6)。

愛による主の訓練をへりくだりをもつて受け止めるわたしたちでありたいと願います。わたしたちの成長・成熟を願うからこそ、主はわたしたちを打たれるのです。